

介護を「される覚悟」と「する覚悟」 ～いつかは来る最期に向けて～

特定非営利活動法人静岡県介護支援専門員連絡協会 理事 戸田美也子

平成 29 年 1 月 5 日に日本老年学会と日本老年医学会が現在の「65 歳以上を高齢者」とされている老齡定義を「75 歳以上とするのが妥当」とする提言を発表しました。

確かに 10～20 年前と比べて 10 歳程度若返っていることは日常の業務（介護支援専門員）で感じています。

介護保険スタート当時は 80 歳代で亡くなられたら、長生きされたと感じたものですが、最近では 90 歳代の介護保険の利用者が大勢いて、70 歳代で亡くなられたら「早かったですね」と言っています。

周りを見渡せば、定年退職した方が、地域のボランティアで活躍されていたり、朝、夕決まった時間に散歩されている姿をよく見ます。中には NPO 法人を立ち上げ、第二の人生を仲間と一緒に歩み始めた方もいて、そのバイタリティに頭が下がる思いです。

しかし、その一方では、やはり、高齢からくる疾患や障害と闘われている方、その介護に苦勞されている家族の存在もあり、高齢者の実態はより一層、多種多様化しています。

さて、看取りをテーマにした講演を依頼された時、会場の参加者の方に聞くことがあります。「自分の最期はどこを望みますか？」「自宅」と答える方が 7～8 割、しかし、その中でも「そうは言っても多分、病院で逝くと思う」と言う方が多いのも現状です。なぜ・・・日本人らしいと言えばそれまでですが、「家族に迷惑をかけたくない」が本音のようです。今や、老々世帯や独居が増えていることからみれば、独立した子供の生活に自分の最期が影響を与えることが辛いのでしょうか。しかし、それでは自分の死をもって出来る「子供や孫への最後の教育」は出来なくなり、ますます「死」は遠い存在になってしまうと思います。病院や施設での最期を否定しているのではなく、最期の世話をし、されて、「死」を間近に捉えられるのではないのでしょうか。命の尊さ、命の重みを感じる機会は大切にしてもらいたいと思っています。「死」をタブー視している今の日本、これからの多死社会に向けてそろそろ、親や自分の死としっかり向き合ってみてはいかがでしょうか？